ボスニア・ヘルツェゴヴィナ内戦の
すべての犠牲者の方々に
心より哀悼の意を捧げる

他国防衛ミッション

目次

イントロダクション……1
第一章　サラエヴォ――狙撃兵が去った危険地帯を行く――……7
サラエヴォの宿　9
スナイパーストリート　13
第二章　モスタル――美しい古都に今なお残る対立――……31
世界遺産の石の橋　35
モスタルの二つの内戦　38
分断の街　40
スパニッシュスクエア　44
民主主義の空白　51

第三章　再び、サラエヴォ――内戦を振り返る場所――……55
オールドタウン　56
希望のトンネル　61
国の中のセルビア人共和国　71
子どもたちの戦争資料館　77
「人道に対する罪とジェノサイド」博物館　80
ギャラリー11・07・95　86

第四章　スレブレニツァ――国連平和維持活動の失敗――……91
語られないトラウマ　95
よみがえった町並み　104
オランダ人部隊　ダッチバット　108
大虐殺のタイムライン　113
国連安全地帯で起こった人道上の悪夢　132
挫折した国連人道ミッション　137

オランダ政府のダメージコントロール　138
犠牲者追悼記念 共同墓地　139
追悼記念ミュージアム　146
オランダ人部隊 カレマンス司令官　150
生と死のストーリー　156
魂の叫び声　157
スレブレニツァの大虐殺 ――国際社会の失敗　161
メモリアルルーム　165

第五章　平和のレッスン
――ボスニア・ヘルツェゴヴィナ内戦が日本に問いかけるもの――……173
UNPROFOR　174
スレブレニツァの教訓　178
派遣元政府の責任　179
不測の事態への対応能力　185

各国との情報共有と信頼醸成　189
最小弱者が生存するために　191
「民族浄化」への対応のジレンマ――「中立性」への疑問　197
民族多様性とポリティカルウィル　200
UNPROFOR当時の日本　201
日本の前提とリアリティの危険なギャップ　203
日本へのプロポーザル　208
第六章　明日への祈り……215
おわりに……223
主要参考文献……231
略語一覧……232

イントロダクション

「民族浄化」が再びニュースで報じられるようになったのは、私がボスニア・ヘルツェゴヴィナの現在について取り組み始めた頃のことだった。ミャンマーの少数民族の一つ、ロヒンギャの人々への弾圧に関する問題について、あの忌まわしい言葉が再び使われるようになったのだ。

その「民族浄化」――エスニック クレンジング――という言葉を聞いて、一九九〇年代前半に起こったボスニア・ヘルツェゴヴィナの壮絶な民族紛争を思い出したのは、私だけではないだろう。

一つの国の中で平和的に共存していた異民族が対立を始め、激しい内戦が繰り広げられたボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、約一〇万人の死者と二〇〇万人以上の避難民を出したと言われている。その民族紛争勃発当時、私はワシントンD.C.にある大学院の国際関係学の修士課程に学んでいたが、講義でもこの内戦については頻繁に取り上げられた記憶がある。「エスニック クレンジング」という、耳慣れない恐ろしい表現について、教授もアメリカ人学生も、そして留学生の私自身も、恐怖の念と嫌悪感を合わせたような感情を抱いていた。

「平和と紛争解決」プログラムを専攻していた私は、激化する一方のボスニア・ヘルツェゴ

ヴィナ内戦について関心が大変あったが、戦況は一大学院生が足を踏み入れることなどできない厳しいものだった。私はその後も同分野の研究を続けるとともに、国際協力の仕事に就くのだが、バルカン諸国にかかわる機会には恵まれていなかった。

そんなわけで、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの内戦が終結して二〇年以上が経ち、私はこの国のことを思うことはほとんどなくなっていた。それはたぶん世間も同様で、二〇一六年に旧ユーゴスラヴィア国際刑事裁判所で、内戦当時のセルビア系指導者だったラドヴァン・カラジッチに禁錮四〇年の有罪判決が下された時も、翌年、セルビア系武装勢力の司令官ラトコ・ムラディッチに終身刑の有罪判決が出された時も、日本では、さほど大きな世間の関心は引かなかったと思う。

しかし、この時期に思い立ってこのポスト紛争国を訪れ、過去の民族紛争を振り返りながらこの目で見て回ってみると、ほぼ四半世紀を経てボスニア・ヘルツェゴヴィナの復興は確実に進み、今では多くの外国人旅行者が訪れるヨーロッパの新しい観光国に生まれ変わっていた。旅行者は主に欧米や中東からで、日本人にはヨーロッパ旅行好きな人が多いのに、「恐ろしい紛争のあった国」というネガティブなイメージがいまだに残っているのが一因だろうか、もともとは風光明媚なこの国のあふれる魅力が日本人の間では、まだあまり知られていない。

他方、ボスニア・ヘルツェゴヴィナには、やはり過去の内戦の傷跡が深く残っているのも事

実で、今を生きる私たちの世界について、私たちの平和について、様々な示唆が残されていた。

この国の壮絶な内戦は、はるか遠い国で起こった、日本とは無縁のことでは決してない。特に、日本が議論し続けてきた国連の平和維持活動への参加や、日本の国際貢献のあり方に関して、貴重な教訓や具体的な課題が示されている。それは、長年、国際協力の現場に携わってきた自分にとっても大きな発見であり、本書はそうした問題意識をもとにまとめたものである。

激化するボスニア・ヘルツェゴヴィナの内戦状況に対応するために国連平和維持活動が開始されたのは、日本が初めて本格的に参加した国連平和維持活動――いわゆるＰＫＯ――である国連カンボジア暫定行政機構（ＵＮＴＡＣ）が始動したのとほぼ同時期の、一九九二年のことだ。こういえば、日本とはあまりなじみのない旧ユーゴスラヴィア連邦の国で民族紛争が起こった当時の世界の状況について、より身近に考えることができるかもしれない。

☆

本書についてまずお断りしておかなければならないのは、本書は専門的な歴史書でも、観光ガイドブックでもないということだ。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ内戦について焦点を当てているが、その内戦を包括的に検証する参考書でもない。それをまずお断りしておきたい。訪れた土

地や場所について、必要最小限の歴史や説明は含めているが、それについても内容はまことにランダムであり、ハプニング的な展開によるものだ。

そういう本書の性格上、抜けているものは多いはずなので、本書を読んで、ユーゴスラヴィアやボスニア・ヘルツェゴヴィナについてより詳しく、系統的に史実を学びたい、あるいは、もっと多くの観光地について知りたいというように思われた方は、ぜひ、そうした分野の専門書をあたって頂くようにお願いしたい。

次に、いくつか用語の説明をしておきたい。そうするにあたっても、古代、中世までさかのぼっての背景や経緯は省略し、現在にかかわるミニマムなものにとどめておく。

最低限でも説明が必要なのは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナには異なる民族が共存してきた長い歴史があり、国家を構成する主体である人々について、いろいろな呼び方が存在するからだ。

最初に、内戦のニュースなどでよく用いられた「ムスリム人」については、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの民族グループの一つとしてご存知の方も多いと思う。

「ムスリム」とはイスラム教徒のこと、つまりイスラム教を信じる人、という意味だ。日本語ではよく、それにさらに「人」をつけて「ムスリム人」と言われてきたが、それでは意味的に、

「イスラム教徒人」という奇妙な呼び方をしていることになる。

背景には、この国の他の主要民族である、セルビア正教のセルビア人及びカトリックのクロアチア人との違いを明確にされることを望んでいたイスラム教徒の人々の存在があり、その人たちが「ムスリム人」という、宗教が民族概念に使用された独特のアイデンティティを与えられたのだ。セルビア人を「セルビア正教徒人」、クロアチア人を「カトリック教徒人」と呼ぶようなもので、ユーゴスラヴィア時代のボスニア・ヘルツェゴヴィナに生み出されたきわめてユニークな民族概念である。

しかし、現在は、国民の民族的分類として「ムスリム」は使われていない。人口統計では「ボシュニャク」という名称を用いるようになっている。「ボシュニャク」とは、もともとは宗教や民族の違いにかかわらず、主にボスニア・ヘルツェゴヴィナに住む南スラブ人のことをそう呼んでいたが、現在は、基本的に「ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム」を意味する。

要約すると、現在、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、ボシュニャク、セルビア人、クロアチア人、その他、という四つの民族のカテゴリーを公的に使用している。「その他」には、ユダヤ人、ロマ民族といったマイノリティの人たちが含まれる。

もう一点の説明は、本文中、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ国民のセルビア人、クロアチア人を、セルビア国民のセルビア人及びクロアチア国民のクロアチア人と混同しないために、それぞ

れ「セルビア系」、「クロアチア系」というように表現している。それに加えて、ボシュニャクについては「ムスリム系」としていることが多いが、文脈によっては「ボシュニャク人」「ムスリム人」という表現も用いている。

入り込んだ民族のジグソーパズルを一つ一つはめていくようで圧倒されてしまいそうだが、本書では、こうした大変複雑な民族構成を持つボスニア・ヘルツェゴヴィナを、現地の人々とのエピソードを時に交えて、なるべくわかりやすく、ごく普通の人間の視点に立って伝えることに留意した。

第一章

サラエヴォ――狙撃兵が去った危険地帯を行く――

サラエヴォ国際空港。飛行機から直接、空港のコンクリートの地面に降り立った。

空気が違う。

唐突に、そう感じた。

到着は午後二時過ぎ。晴天で、まばゆい陽の光が注いでいる。あたりを見回すと、二階建ての小さいターミナルビルがあり、反対側に目を向けると、赤黄緑色の小高い山々があった。

そうだ、山の空気だ。

東京生まれで東京育ちの私には登山の経験はなく、山が近くに見えるような土地に住んだこともない。この一〇年ほど、自然あふれる環境に身を置く機会もほとんどといってなかったと思う。だからだろうか。自分がなじみのない空気の中に立っていることに気づき、不思議に思ったのだ。

風はなく、日差しは強烈で、想像以上にかなり暑い。しかし、カラッとしたすがすがしい空気が心地よかった。

異国を初めて訪れる時には、いつも特別な感覚を覚える。感動というのとはちょっと違う。英語でいうなら mixed feelings だ。期待と不安が入り混じる心で、私は入国手続きの待つビルを目指して歩き出した。

初めてではあったが、この空港には見覚えがあった。といっても、それはバーチャルなもの

で、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争について伝える国際ニュースに映し出されていた、当時の空港の様子が記憶に残っているのだ。

サラエヴォ空港は内戦勃発してまもなく、セルビア人主体のユーゴスラヴィア人民軍とセルビア系武装勢力によって占拠された。その空港を、人道支援物資輸送の飛行機の離発着のために国連の管理下に置くことを可能にしたのは、危険を冒して砲火交わるサラエヴォを電撃訪問し、交渉を成立させたフランスのミッテラン大統領だった。セルビア系武装勢力は撤退し、以後、ブルーヘルメット、すなわち国連軍の兵士たちが配備され、空港の安全を守ることになった。

もちろん、現在ある空港ビルは当時のものではなく、紛争終結後に再建されたものだ。

サラエヴォの宿

空港には、宿泊するアパートメントのオーナーのSさんが迎えにきてくれた。Sさんの車に乗り込んでから二人でさしさわりのない天候の話をしているうちに、幅の広い道の両脇にポツポツとビルが見えてきた。新しいビルの建設がされているのをながめる私に、

「サラエヴォの街並みは、今はよく整えられているでしょう?」

と、Sさんが言った。

Sさんは車を走らせながら、その景色に合わせるようにして復興の様子について話した。上手に英語を話すSさんは、その過去の戦いを語るのに、「war」という言葉を使った。

あぁ、そうなのか。私は着いて早々に、気づきを得た。日本では一九九〇年代のこの国の内戦を「ボスニア紛争」と呼ぶことが多いが、この国の人たちにとって、それは「war」、戦争そのものだったのだろう。

私はその後も、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの人々から、何度も「war」という言葉を聞くことになる。誰一人として、「conflict」（紛争）とは言わなかった。

それにしても、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの人と当時の悲惨な出来事について話すのは初めてだったので、何をどこまで聞いていいのか、私にはよくわからなかった。すでにメールのやりとりはしていたが、実際にはさきほど会ったばかりだ。Sさんのほうから「戦争」について話してくれたとはいえ、こちらから、あまり個人的な体験を聞くのはためらわれたのだ。

年齢を知らないが、ヒジャブをかぶっておらず、セミロングの髪をおしゃれにアレンジしているSさんの容姿から想像すると、当時はティーネイジャーというところだろうか。

私は、あいまいに尋ねた。

「今はどんな感じなのでしょう？　この国の平和は保たれていると思いますか？」

「私たち、普通の人々の間では。私たちは問題なく仲良くやっていると思いますよ。問題なの

は政治家たち。自分たちの利益で動くから。すべてポリティクスが問題」

ポリティクスが問題なのは、どこの国でも同じようだ。しかし、この国の人から聞くと、重みが違う。

「私たちはみんなでうまくやっていこうと思っているし、実際にうまくやっているんですよ。宗教の違いなんて問題にしたりしないし」

Sさんの語り口調からは、自分たちの平和な生活を守りたいという真摯な思いが伝わってきた。

道は複数車線の大通りとなり、市街に入って歩道を行く人々の姿も目につくようになった。やがて車は大通りから右折し、さらにいくつかの通りを曲がったあとで、Sさんのアパートメントがある建物の前で止まった。

アパートメントビルとしては思ったよりひょろりと背が高い。旧ユーゴの社会主義時代に建てられた高層アパートなのだろう。外見は古く、コンクリートが剥がれているような箇所も目につく。

中に入ると暗いエントランスの奥にエレベーターが二台あって、中年の女性が一人、エレベーターを待っていた。女性はSさんと知り合いなのか、私たちを見るとすぐさま声をかけてき

た。現地の言葉なので、何を言っているのか、私はわからない。とはいっても、見慣れぬ外国人の私のことを聞いているのだろうと、想像がついた。Sさんが、日本から来た人だと説明しているようだ。

すると、その女性が、今度は英語で私に話しかけてきた。

「いやはや、なんでまたこの国に来たのかい?」

とても気さくな話し方なので、訳すとこんな感じになる。そんな想定問答は用意していなかったが、私はとっさに答えた。

「この国がとても美しい国だからですよ」

この国の歴史に興味があってとか、平和の状態を知りたいとか、そういうむずかしいことは、自分の頭の中に置いておいた。

「そうよ、この国は本当に美しいのよ」

私の答えを喜んでくれたようで、中年の女性がうれしそうに言った。

「七階にいるから、なにかあったらいつでも寄ってらっしゃい。ドアにね、名前が書いてあるから。スペルは……」

その人がさらに続けようとしたところで、Sさんが会話に割って入った。

「この人は一泊しかしないから」

「あら、そうなの？　たった一泊？　まぁ、残念だわ。この国はいいところよ。楽しんでね」

私としてはそんなふうに普通のサラエヴォ住民の方と話をする機会は大歓迎だったので、なにかなくても、ぜひともお邪魔します、と答えたかったのだが、Sさんは、私が見知らぬ人から長々と話しかけられて、困っていると思ったのかもしれない。

スナイパー ストリート

Sさんのアパートメントが位置的によかったのは、バスターミナルに近いこともあるのだが、もう一つ大切なポイントだったのが、「スナイパー ストリート」、文字通りに訳せば「狙撃兵通り」に近いことだった。

戦争中に多くの市民が狙撃兵の銃弾の犠牲となった悪名高いその通りを歩いてみること。そして、その通りにある旧ホリデイ・インに行ってみることは、私がサラエヴォ到着後の行動リストの上位にあった。加えて、旧ホリデイ・インの向かい側あたりに国立博物館と歴史博物館があり、午後七時まで開いているらしいので、時間的に間に合えばそれらを見学したい。

ただ、アパートメントに向かう車の中で、Sさんには、博物館に行ってみたい、とだけ言った。スナイパー ストリートを歩いてみたい、とは言えなかった。そんなふうに言ってしまうの

はなにか軽すぎて、ためらいを感じたのだ。かつて無情なスナイパーらによって一般市民の命が次々と奪われたその場所を、観光気分で見に行くかのように聞こえてしまうのでは。私はそんなことを恐れたのだと思う。

「博物館なら、さっき車から見えたミリャツカ川沿いの通りをずっと歩いて行けばいいですよ。一〇分くらいで行けますから」

私の言葉を信じたSさんは、そう教えてくれた。

十一階のアパートメントに着くと、ドアには鉄格子の防犯扉がつけられて二重になっている。Sさんは室内に入ることもなく、鍵の開け閉めについて説明すると、あっさりと立ち去っていった。サラエヴォの人のテンポはまだよくわからないが、あとの予定が詰まっていたのかもしれない。

アパートメント内では靴を脱ぐルールになっていたが、これはイスラム教の習慣によるのだろう。私は、世界最大のイスラム教徒人口を持つインドネシアに仕事で何度も滞在した経験から、この習慣を知っていた。インドネシア人の自宅にお邪魔する際には、現地の人にならって、いつも靴を脱いでから家に上がらせて頂いていたのだ。同じ習慣を持つ日本人にはなんら問題のないルールだし、自分は海外に出る際にはなにかと便利なスリッパをいつも持参している。私は今回もスーツケースに入れてきたスリッパにさっさと履き替えて、中へと入った。

古びた外見からは想像できないほどきれいに改装されたアパートメントの、モダンなインテリアに感心しながら室内に荷物を置くと、私はちょっと一息ついただけで、再び靴に履き替えて外に出た。

スナイパー ストリートへ直進する予定を変更し、Sさんが教えてくれたその手前にあるミリャツカ川沿いの道を行くことにした。プリントアウトしてきたグーグルマップで確認すると、スナイパー ストリートと平行する道なので、目当てのビルが遠くに見えてきたら、どこかの角を曲がってスナイパー ストリートに出ればいい。川岸の道は、現在は地元の人に人気の散歩道のようだ。車道は車の通行がけっこうあるが、きれいな並木道になっていて、ところどころ、葉っぱが黄色に色を変えている。その両脇の歩道は広く、小さいヨチヨチ歩きの子どもを遊ばせている若い母親たちがいたり、子犬を連れてゆっくりと散歩している老齢の人たちがいたり。実にのどかな風景が広がっていた。

この辺りはムスリム系住民が多く占めていた地域だったが、サラエヴォで内戦が始まると、まもなくセルビア系武装勢力の支配下に置かれた。地域の住民は自ら逃げたか、強制退去させられたか、捕虜になったか、殺されたか、のいずれかだ。約四年間にわたるサラエヴォ包囲が終わりを告げると、セルビア系武装勢力が撤退し、この地域はようやくボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府側に戻されたのだ。

ミリャツカ川をはさんで北側のこの通りでは、セルビア系勢力が川を越えて中心部に侵攻するのを食い止めるため、激戦が繰り広げられた。

私はそのかつてのバトルフィールドと化した通りを歩いているのに、歩道には、とまどうほどのんびりとした空気が漂っていて、当時の様子を想像するのはひどくむずかしかった。Sさんは一〇分で着くと言っていたが、さらに歩くこと二〇分ほど。並木道の左側の先に、ようやく、あの黄色いビル、旧ホリデイ・インが見えてきた。

旧ホリデイ・インは、一九八四年にサラエヴォで開催された冬季オリンピックのために建築された。オリンピック開催国は当時のユーゴスラヴィア。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは旧ユーゴ連邦を構成する共和国の一つだった。

それまでのサラエヴォのホテルは外観もインテリアもオスマン帝国やハプスブルク帝国（オーストリア＝ハンガリー帝国）時代の影響を受けたものがほとんどだったが、このホリデイ・インはその影響下から抜け出した新しい時代のサラエヴォを象徴するかのように、当時からすると流行の最先端を行く国際的なホテルとして誕生した。建築という観点からすれば、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの長く古い歴史に区切りをつける存在に、このホテルはなったのだ。

ホテルは、国内外の政治家や著名人、芸能人などが集う華々しい社交の場となった。

その後、ティトーの死によりユーゴスラヴィアが危機の時代に入ると、ホリデイ・インが持つコンフェレンスルームには、地域の政治家たちが頻繁に出入りするようになって、インターナショナルな観光ホテルはこの地域の行方を議論する政治フォーラムの場へと変容していく。

そして一九九二年四月。このホテルは、また、新たな歴史のまっただなかに立たされることとなった。一九九六年二月二九日まで続く、サラエヴォ包囲だ。

ホテルが面するサラエヴォのメインストリートを行く住民たちは、街を取り囲んだセルビア系武装勢力の標的となった。熾烈な内戦の様子が世界に漏れ始めると、ホリデイ・インは、サラエヴォ住民の惨状を報道しようと続々とやってくる外国人ジャーナリストたちをメインゲストとして迎えることとなった。

しかし、その一方で、このホテルにはあまり語られていない同時代の歴史の裏側もあった。

一九九二年四月五日。ムスリム系勢力が占めるボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府が独立宣言すると、それに反発したセルビア系勢力との対立が激化。翌日、当時のＥＣ（欧州共同体）がボスニア・ヘルツェゴヴィナの独立を承認すると、多民族共存による平和を求め

る群衆が、反戦を訴えてボスニア議会ビルに集結した。

当時、ホリデイ・インには、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア系政治指導者で、のちにジェノサイドと人道に対する罪で裁かれることとなったラドヴァン・カラジッチを党首とするセルビア民主党の事務所が置かれ、カラジッチ一派の拠点となっていた。カラジッチ勢力のスナイパーは、議会ビルから大通りへと平和行進を始めた群衆に向けて、ホリデイ・インから発砲。六名の犠牲者が出た。

カラジッチ一派はそのスナイパーによる狙撃の混乱をぬってホリデイ・インから逃走した。すでに、前日にも行われた平和行進の中から最初の犠牲者二名が出ていたが、そのスナイパーの銃弾もホリデイ・インから発砲されたという説もある。

大セルビア主義に基づいた民族主義者カラジッチ率いるセルビア系武装勢力は、隣国セルビアの軍部が主導するユーゴスラヴィア人民軍の支援を受けてサラエヴォを攻撃。反撃するムスリム系のボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府軍との武力衝突が勃発した。セルビア系武装勢力は、サラエヴォの街を取り囲む丘陵地帯に戦略的な包囲網を張り、サラエヴォの街を封鎖した。

そして、セルビア人国家の拡大にむけて、その邪魔者となる存在をすべて消し去ることを目的とした、容赦ない殺戮活動が展開されることになった。

Great Serbia（グレート セルビア）を叫び、ボスニア・ヘルツェゴヴィナをセルビアの支配下に置こうとするセルビア系民族主義者たちにとっての邪魔者とは、ムスリム系住民だけではない。サラエヴォには、そうした勢力の軍事行動に反対し、多民族の平和的共存を求めるセルビア系やクロアチア系の住民もいた。また、ごく少数だが、ユダヤ人、ロマ民族の人々も住んでいた。民族の多様性を誇りとして共生していた、これらの人々すべてが邪魔者だった。カラジッチは、邪魔者の一掃を公言してセルビア系武装勢力を率いた。邪魔者は同胞のセルビア系住民であろうと、容赦なく殺した。

スナイパーストリートに建つ旧ホリデイ・イン

このように、ホリデイ・インは、その後の約四年間で一万人以上の人々が犠牲となったサラエヴォという戦場でも、歴史の舞台となった。オリンピックに集まる世界各国からのゲストを迎えて夢一杯だった開業当時、このホテルがやがて、民族対立による殺戮のただなかに立たされることになるとは、誰が想像しただろうか。

時計の針を進め、一九九六年二月にサラエヴォ包囲がようやく終息を迎えると、ホリデイ・インにもたら

されていたサラエヴォ戦線のフロントラインという位置づけも自然消滅することになった。引き上げていく外国人ジャーナリストと入れ替わるように、今度は、ＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）をはじめとする国際機関関係者が、かろうじて機能を残したこのホテルを利用するようになる。

同時に、破壊され尽くした国の再建のために、海外から多くの援助関係者がサラエヴォにオフィスを開いたが、月日が経って国際社会の支援がだんだんと縮小するにつれ、このホテルの運命も下降の一途をたどる。収益の悪化は止まらず、アメリカで生まれた「ホリデイ・イン」のブランドも失い、一時は閉鎖にも追い込まれた。

その後、現地のビジネスマンが再建し、二〇一六年に「ホテル・ホリデイ」としてようやく営業を再開した。開業当時と同じ黄色い外観は修復され、大規模なフィットネスクラブを備えるなど、復興後のサラエヴォを代表するホテルとして新たな一歩を踏み出した。再オープン後は、サラエヴォ映画祭のガラ・レセプション会場になるなど、ホテルは過去の華々しさを取り戻そうとしている。

私は視界に入った黄色いビルを目指し、数人の地元の人が川沿いの通りから空き地を突っ切って行くのを追うようにして、スナイパー ストリートへと出た。信号が青になるのを待って

から大通りを渡る。地元の人が早足で渡るのについていくが、片側四車線もある大通りなので、道の真ん中にあるトラムの乗り場のところで信号が赤に変わってしまって渡りきれない。内戦中はこのトラムもスナイパーの標的となり、乗客の命が狙われた。私はトラムに乗らない人たちとともに、そこで再び青信号を待ち、ようやく向こう側に渡った。

あたりはビルが立ち並んでいるわけでもなく、にぎわっているという雰囲気はない。内戦で荒廃したままのようなビルも目に入ってきた。さみしげな空気の中、私はようやく旧ホリデイ・インにたどり着いた。

改装されたホテルの外装は、イエローのペンキが塗りたてのようにきれいだ。正面玄関方面の壁に冬季オリンピックのエンブレムが刻まれていた。私は息をひそめるようにして玄関へと近づいて、恐る恐るホテルの中へ足を踏み入れた。

外の明るい陽ざしの中からホテルに入ってきたせいだろうか。目の前を流れる空気が薄暗い。中途半端な時間だったこともあって、ロビーは閑散としていた。右手にフロントデスクがあって、各国の時刻を示す壁時計がずらりと並んでいた。制服姿のスタッフが下を向いてなにかしているが、客はいない。

左手には、カフェかレストランのようなスペースがあったが、この時間は営業していないようで、客の姿もサービスする係の姿もない。ここでコーヒーでも頼んで一休みして、ホテル内の

様子をながめながら、内戦当時のことを回想してみたいと思っていたのだが、あてがはずれてしまった。私は早々に、ホテルから退散することにした。

それに、なぜか、この場所に長く足を留めていたくなかった。

なぜだろう。カラジッチの幻を見たわけではない。しかし、なにかとても空虚なものが私に忍び寄ってくるような感じがした。そのままそこにいたら、自分がその空虚さの中に包み込まれて、息ができなくなるような気がした。

実は、内戦の報道を続けた外国人ジャーナリストたちを描いた映画の舞台にもなったこのホテルへの興味から、私は、一度はここに予約を入れていた。その後、翌日のモスタルへの移動にも便利なSさんのアパートメントを見つけたのでキャンセルしたのだが、それは私にとってはベターな選択だった。実際にその場に立ってみて、そう悟った。このホテルには悲劇的な過去が多すぎて、泊まったとしても私の心は休まらないに違いない。

私は長い時間をかけてここまで歩いてきたにもかかわらず、自分の存在の証を残すこともなくホテルを後にし、スナイパーストリートに戻っていった。

この通りでスナイパーの銃弾の犠牲者となったのは、サラエヴォの人々だけではなかった。